

ら、経済記者として精進した。昭和三十一年十二月には結婚して大阪支社勤務となり、新築の社宅に入れてもらった。そのころには日本経済は、朝鮮戦争後の不況時代をようやく克服して、高度経済成長長期に入り、経済界は活気にあふれていた。

その後も経済記者としていろいろな体験をしたが、現在を無事に迎えたが、残念ながら私夫婦には子宝が授からなかったので、平成五年にケア付きの高齢者住宅に入った。

終戦の前後のあの苦難に満ちた生活から比べれば、それこそ月とスッポン以上の違いのある毎日の生活である。満州の開拓団の方々の苦勞からみれば、私たちの体験はとてはなく勞苦のうちには入らないであろうが、それでも敗戦国民の一人としての悲哀は、嫌というほど味わされたものだ。

あれから半世紀余りを経た、いまだに許し難い思いは満州におけるソ連軍の乱暴、狼藉、傍若無人な行為であり、強制労働である。多くの人が

理由も無く犠牲になったことは、いつの世になっても忘れてはならないことである。

ともあれ振り返ってみると、引揚者の方々が本当に大変だったのは、日本に引き揚げてきてからの生活ではなかったかと思う。あの飢餓地獄を経験しただけに、今、大不況で騒ぐなどということはない、とんでもないことである。金や、物の面よりも精神面で大不況になっているのではないかと思うのみである。

運命に翻弄された私の人生

福島県 高坂 芳夫

私は、当時福島県東白河郡の宮本村といわれていた山間僻地の貧乏農家の長男として、大正十一(一九二二)年の九月にこの世に生を受けた。父は芳之助といい、母はフミ子といった。

この村は、田畑は少なく周囲は山ばかりで、大

半の家では兼業として炭焼きをして生計を立てていたが、その暮らし向きは貧乏を極めていた。私の家も同じで、田と畑を合わせても約三十五アール（約一千坪余り）ほどしかない小作農であった。部落といっても、同じような規模の小作農が七軒点在するだけの小部落であった。

祖父の代には本業として壁塗りの職人をやっていたようだったが、父は主として馬車曳きをしており、ときどきは魚の行商をしてわずかばかりの日銭を稼いでいて、その日暮らしの生活であった。

そのうえに、貧乏人の子沢山と昔からよく言われていたとおり、私の家でも子供が次から次と生まれて、長男である私を頭に十二人の子沢山となった。言うまでもなく生活はとても苦しく、せっかくこの世に生を受けても満足には育たなかった。四番目と五番目の子供は女の双子であったが、生まれて間もなくチエという五番目の子は死んでしまった。また、六番目の弟の幸助も、六

歳になったばかりのころに病気で亡くなった。

このような家庭環境の中で、父は精神的にも随分と苦勞していたのだと思うが、年をとるに従ってだんだんと短気になってきて、酒を飲むようになって、その量も日一日と増えてきた。そして酒が入るとよく喧嘩をしたが、母はいつもその仲裁役で、頭をべこべこと下げては相手に向かって平謝りに謝っていた。母は父の体のことを一番心配していたが、あの母の謝る姿を思い出すと、今でも当時の母の気持ちを察し涙が出て致し方ない。

そんな父ではあったが、馬車曳きの仕事の帰りには漁場に寄って魚を仕入れ、馬車にいっぱい乗せてきて部落、部落を回って商いをしていた。我が家では売れ残りの魚が食べられたので、隣近所の家の食事よりはぜいたくで幸福だと思っていた。当時部落の家では、活魚などは一年に何回ぐらいしか食べられないくらいのごちそうであった。

私の入学した小学校は本校だったが、宮本村は

山に囲まれていたので面積は広く、分校が六校もあつた。当時は、祝祭日になると本校に全生徒が集まつて式があつたが、全員集まつても生徒の数は六十数人だつた。面積の割合には村の住民の数は少なかつた。

本村の役場周辺には商店も少しはあつたが、私は大きな町にある市場やデパートなどというものは、見たこともなければもちろん入つたこともなく、村にある商店の様子だけしか知識として頭になかつた。小学校高学年になつたころ、村などの指導で山を開墾して、段々畑をつくり、主として蒟蒻こんじやを作つていたが、あまり地質がよくないので期待していた収穫がなく、そのうちに中止になつたことを覚えてゐる。その反面、村は静かですごちを向いても山、また山ばかりで寂しく、面白いこともなく、世の中というものはすべてこのようなものであらうと思つてゐた。現在のようにTV、ラジオ、新聞などが一般化してゐない時代であり、村の外のことは全然知ることになかつた

し、知ろうとしなかつた。

後々になつて思つたことだが、母は十六歳で嫁にきて十二人もの子供を次から次に産み、そして育ててゐたことは大変な苦勞であり、他に何の楽しみもなく苦勞だけで貴い人生を終わらせてしまつたのだと思ふとかわいそうになり、何も報いることもできなかつたことを悔いる気持ちでいっぱいだったが、昔から伝えられるように、そう思つたときには既に母は亡くなつてしまつてゐた。無念の涙をのむ思いである。

昭和十二（一九三七）年の七月に盧溝橋事件が起きて、そのまま拡大して支那事變へと發展していったが、その年の三月には村の尋常高等小学校の高等科を卒業して、家の農作業などをしてゐた。村役場でのポスターで、茨城県内原村にある満蒙開拓青少年義勇軍のことを知り、応募する決心をした。

満州大陸は果てしない草原が続き、土地も肥沃で何でもよく育つて樂土のようだと宣伝されてい

た。また、義勇軍では鉄砲を持って軍隊と同じような規律正しい日常生活をしていて、兵隊に行つたのと同じ資格が与えられるとも言われた。当時はだんだんと軍国主義的な世相となっていて、新聞やラジオで報道される皇軍の活躍を知ると、私も何かお国のためにつくしたいと思うようになっていたが、徴兵検査にはまだ間があるのでそれならばと、義勇軍に行きたい思いが日に日につづっていた。そのうえに、開拓団に行くと土地が一人十ヘクタール（約千アール）も持てるようになる。と教えられ、自分の家の土地のことを思うと夢のようなもので、すぐに決心をしてしまった。自分の農耕地を十ヘクタールも持つという事は、福島では考えられないことであり、農家の若者にとってはこのうえもない魅力的なことであった。両親に相談したら、一も二もなく賛成してくれた。

数回に亘る試験にもどうか合格し、第一次の青少年義勇軍の一員として福島県内からの入隊者

二十七人と共に、内原訓練所に入ったのは昭和十三年三月であった。村を出るときには、村長さん以下村民総出の盛大な見送り行事によって送り出された。まるで出征軍人と同じで、家ではなければの赤飯で祝ってもらい、駅前には旗やのぼりで埋まっていた。汽車が出るときは、「万歳！ 万歳！」の声で家族との話も聞きとれなかった。

内原に着くとすぐに、丸くて屋根のトンがった大きな建物に入れられたが、これが日輪兵舎という内原訓練所の象徴的な宿舎だった。「満蒙開拓の父」と言われた加藤完治先生の訓示を一番最初に聞き、気持ち引き締められた。加藤先生は、ちょうど三国志に出てくる武神の関羽のようなひげをのばした立派な人だった。

その日からすぐに、規律厳正にして規則正しい毎日が始まった。教練と学習と、そして実習の連続で、ときには加藤先生をはじめとして高名な識者の方々の訓話もあった。宮本村での単調な生活とは一変した集団生活のなかに没入して昂奮を覚

え、希望に燃える日々であった。

五月下旬には内原訓練所を出て、ハルビンの訓練所に入る事となり、訓練所の全員から見送られて出発した。まず東京に行き、宮城を遙拝し明治神宮に参拝するなど昂奮の連続だった。その後新潟に向かい、新潟港から連絡船で朝鮮に渡り朝鮮半島を縦断して憧れの満州国に入り、ハルビンに着いた。

初めて見る満州の大平原は想像以上のものがあり、度胆を抜かれてしまった。満蒙開拓青少年義勇軍に入って本当によかったと、しみじみと感じた。

ハルビンの訓練所は、六個中隊の編成で、所長はかの二・二六事件に連座して退官された元陸軍の将校だった方であった。私は齋藤正文隊に所属した。副隊長は佐宗さんで、その下に農事指導柿下さん、教学担当寺山さん、訓練担当が根本伍長であった。中隊には、北海道と青森、秋田、岩手、宮城、福島の東北五県、それに東京、神奈

川、埼玉の関東勢、新潟、愛知、滋賀県などの出身者三百人が一個中隊員として編成されていた。お互いに県出身以外の隊員と日夜を共にすることは、いろいろと勉強になり楽しかったが、言葉がみんなお国訛で、しばらくは理解するのに随分と苦労したものだだった。相手も福島弁には大分困っていたようだった。

毎日、早朝から厳しい日課時限に従っての学科、術科、教練、そして実習が広大な所内で、暑さ厳しい炎天のもとで繰り返された。特に、実習場はどこまでが場内だか分からないくらいで、福島の山地では考えられないことだった。訓練が順調に展開しているところに、内原から加藤先生をはじめ幹部の方の現地視察があり、私はちょうど、表門警備の勤務についていて、懐かしい先生方を目の前でお迎えしたが、そのときの感激は今になっても忘れられないのがあった。

八月になると、はるばるドイツから視察に来た、ヒットラーユーゲント青少年団の一行を迎え

たが、その際も表門警備に立っていて、身近に接することができて感激したものだ。所長以下の幹部が表門に整列して歓迎の敬礼をする中、青年団員八人が片手を高くあげて答礼をしながら、靴音高く入って来たときの光景には感銘を深くしたが、これも忘れ得ない思い出である。

ハルビン訓練所での三カ年間の訓練を無事に終了して、昭和十六年の春に私たちの斎藤隊は、義勇軍第一次集団として、浜江省葦河県瑞代義勇開拓団に入植し、満州平和郷の開拓・建設の理想に燃え、まさに意気天を突く有様であった。

瑞代開拓団の場所は、一面坡イェンパ駅から森林鉄道を利用して約五キロメートルばかり奥地に入ったところで、松花江の支流近くであった。埼玉県から入植した埼玉開拓団も近くで、周囲には山もあり鳥や獣も多くいて、福島では見たこともないようなのがたくさんいた。白系ロシア人の部落も近くにあり、だんだんと親しくなってきた、お互いに交流を始めるようになった。その反面、匪賊の出

没も多く油断はできずに、日夜銃を片手に緊張の連続でもあった。

開拓団での厳しい生活に馴れてくるに従って、徐々に身の回りにも余裕が出てきて、開拓作業の合間には楽しいこともあったが、その楽しみもいつも危険と裏腹だった。

入植して二、三年は夢のごとくに過ぎたが、その間にもいろいろなことがあった。仲よくなっていた白系ロシア人に誘われてノロ（野鹿）射ちに行ったときのこと、ノロを追い過ぎて山奥に入り過ぎてしまった。そこで匪賊と出会い、十数人の一団から一斉射撃を浴びせられたので、同行の白系ロシア人と二人で応射したが、多勢に無勢、形勢は悪くなり、対等に応射することを止めてここは逃げるにしかずと決め込んで、必死になって逃げ回ったが、そのときの恐怖は忘れられない。そのまま匪賊が開拓団まで襲って来るのではないかと、頭がいっぱいだった。開拓団では非常警戒配備について、数日間は昼夜警戒態勢をとったが、

私は団長からこっぴどく叱られた。また、開拓団で飼育していた豚がとん走して山の中に逃げ込んだことがあったが、一年近く経ったある日、ひょっこりと戻ってきた。猪の仔を七匹もぞろぞろと引き連れてきてびっくりしたが、近在の開拓団でも大きな話題となった。

だがそんな話ばかりではなく、団内でのいろいろな抗争も絶えなかった。主に他県出身者とのトラブルで、殺傷事件にまで発展し、死亡者を出すような事件も起きていた。共同生活をしていても、他県の者との融和団結がなかなかできなかったのは事実である。このような事件は、ハルビン訓練所においても発生していて、厩当番が他中隊の厩当番と対立し殺傷事件となったことがあった。このようなことは、血気盛んな若者がその持て余す精力を、よい方向に発散することができずに、つい些細なことから血を見るようなことになってしまふのであるが、団の幹部も頭を痛めており、なかなかよい対策はなかったようだった。

入植して一、二年が経つと、どうしても故郷を思い出して心身共に嫌気がさしてきて、鬱^{うつ}症状となる人が多いが、私も同じ症状をきたした。いわゆる屯墾病といわれる一種の郷愁病である。このままでは、せつかくここまで努力してやってきた開拓の仕事も止めるしかないと思うようになり、福島の実家にも手紙を出して悩みを訴えた。両親をはじめ、親類の人たちも随分と心配してくれたらしい。

そのうちに兵隊検査の適齢期となり、徴兵検査の結果、第二乙種の補充兵役となった。しばらくは待機のまま開拓団に残っていたが、やがて召集令状がきてハルビンの輜重兵連隊に入隊した。想像していた以上に厳しいもので、義勇軍時代の訓練とは比較にならないもので、やはり軍隊は生死をかけて戦争をする組織だから生易しいものではないということ、入隊してすぐに悟った。

古年兵の鉄拳制裁もしょっちゅうで、制裁のためには体が痛くなっていた。さらにそれ以上に苦

痛だったのは、腹が空いてどうしようもないことだった。開拓団にいれば食べる物だけは自由に手に入り、空腹などということは考えられもしなかったが、軍隊生活では自分だけ好きな物をつかって食べることもできなかった。幸いに輜重兵連隊だから軍馬がいたので、その軍馬の飼料である大豆粕や高粱などの上前をはねて食べたこともあったが、すぐにそのことがばれて罰直を受け、往復ビンタを十数回はられ、その挙げ句のはてに暴れ馬の当番を命ぜられた。当時連隊にいた軍馬は、激しい気性の馬や人間に全然馴れない性格の馬でも徴用されて軍馬にされていたので、そのような馬を扱うことは、死を覚悟しなければならなかった。腹を蹴飛ばされて、腸が破れて死んだ同年兵もいたくらいで、それはそれは筆舌に尽くせないような凄惨なことであった。

輜重兵であるからかどうかは分からないが、一年余りしたら除隊となり、開拓団に戻った。

軍律厳しきところで鍛えられたせいも、開拓団

に戻ると団内の規律がたるんでいることがすぐに目についた。内原からハルビンの訓練所で正しい日常生活を過ごしてきた私は、開拓団の規律は随分厳しいものだと思っていたが、軍隊経験をしてみると、瑞代開拓団の規律などはまったく生ぬるいものだと感じた。これではいけない、開拓団の規律をもっと引き締めなければ、何か事が起きたときに大変なことになると考えるようになった。

それに、一年余りの軍隊生活で団を離れている間に、今までの人間関係も崩れてきて、気持ちがい前とは全然変わってしまった、夢も希望もなくなってしまったという感じになってきた。さらに、またいつ再び召集されるかも分からないという不安もあり、だんだんと一匹狼的な立場をとるようになった。

私は、父親に似ていて喧嘩早く、何かというときに喧嘩を売る性格だった。あるとき同じような性格の仲間と組んで、団内で大喧嘩を起こし、刃物を使って相手に大けがを負わせる事件を起こ

した。団幹部の取り調べを受けた結果、関係者八人と共に退団処分を受け、瑞代開拓団から追放されてしまった。

当時は、開拓団を追放された者は、現地人の仲間に入って満人として生活するより他に道はなかったが、そこまでの決意もなく、致し方なく福島に帰ることとした。

だが、そんな事情で故郷に帰っても誰も相手にしてくれるものもなく、居心地は悪かった。それにあの広々とした大陸からこの山奥の狭苦しい村に来てみると、息をすることさえも苦しくなってきた、悶々とした日を送っていた。早く召集令状がくればよいと思うようになってきた。

そのように生活が荒れていたころ、郡山市が都市再建計画と戦時疎開推進の両面の施策として、満州に郡山分郷を建設し移住希望者を送り出すこととなり、その先遣隊もすでに出発して受入れ準備が始まったので、本隊を送り込む段階となり、希望者を募集していた。私にも経験者ということ

で誘いがかかったので、渡りに舟とばかりに喜んで応募し採用された。近郊近在からの移住希望者が続出し、予定人数がすぐにまとまった。満州の事情を知っているということで、引率責任者の一人となつて、思いもかけなかった再渡満をするこゝとができた。

今度の行き先は、三江省依蘭県西阿の第十二次郡山市分郷集団開拓団で、昭和十九年の四月に現地に入った。既に昭和十八年に先遣隊が入植していて、受入れ準備は十分とはいえないまでも整っていたが、先遣隊の苦勞は大変なことだったと思つた。

芳原団長のもとに、第一部落、第二部落に分かれていたが、宮本村で隣同士だった人や小学校以来の同級生だった者などの顔見知りがたくさんいて、心強い限りだった。私は、野口与八、金沢正雄などと第二部落員となつた。

満州馬十五頭、朝鮮牛二十頭、それに専属苦力クイリの満人二人を使い、忙しいときには日雇い苦力を

毎日数人使って農耕を始めた。開拓団で保有していた食糧品は十分ではなかったので、配給も思うようになく随分と苦労したが、これも開拓の初期の段階ではどこの開拓団でも同じことであり、あまり文句は言えなかった。

開墾の成績はまあまあというところで、移住者はみんな希望を持ちはじめていたが、元来は郡山市内などでいろいろな職業に従事していた人々で、職人、商人などが主で、農業経験者は少なく、指導も思うようにならなかった。

農作業の要領がなかなかつかめず、苦労ばかりが多くなってきて、日が経つにつれて作業意欲が低下し、団内の志気も衰える一方となった。全責任を負っている芳原団長以下の開拓団本部の幹部は、随分と苦労をしていたようで、毎日、夜になるまで一軒、一軒の家を回ってはいろいろと話し合い、指導と督促をしていた。だいたい、この三江省依蘭県という土地は農耕に適した土地で、地味肥沃で多種多様な開拓団が入植していたとこ

ろである。

郡山市分郷集団は、松花江岸にある依蘭から約十キロメートルばかり北西に入ったところで、松花江の支流がつつら折りに屈折して流れていて、兩岸には奇岩、怪石が多く、満州国内でも屈指の風光明媚なところである。松花江支流には大きな魚がいて、現地人は適地に生け簀を設けて捕った魚をそこに貯めていたが、私たちにはそれを買うお金もないので、江に飛び込んで素手で捕まえていたが、ときには大物を抱え込み、魚が暴れ出して尾鰭で脇腹を叩かれ息が止まりそうになったこともあった。脇腹には大きな痣あざができて大分長く消えなかった。

山も近くにあっていろいろな山菜が採れて、みんなを楽しませた。故郷、福島の中では見たことも、もちろん食べたこともないようなのがたくさん採れた。山ぶどうも豊富で、採ってきては瓶に詰めて保存食料としていた。

原野には熊、野生の鹿、各種の鳥など、動物と

いう動物は何でもいたが、開墾作業に追われて狩猟などをしている余裕はなかった。

入植した年には、部落全員が食べるための必要量を確保することはできなかった。

地に腰を据えて開拓農業をするとなると独身では生活も落ち着かず、また一人よりは二人で作業をする方が能率も上がるので、所帯を持つことを考え始めた。十二月になって世話をしてくれる人があって、宮本村の村会議員をしている人の娘、ヤス子と結婚をすることになり、翌年昭和二十年の正月には、何はなくとも幸せいっぱいの新婚家庭を持つことになった。新婚生活といっても、戦時下のしかも開拓途上の地での急造新婚家庭であり、家財道具など何も整っていなかった。貧しい生活に変わりはないが、それでも土地が広くよく肥えた新天地での新婚生活には、希望で胸が膨らんでいた。ヤス子は女学校を出ていたので、部落にも新しい空気を注入してくれた。

今年こそは、主食類をたくさん収穫して、畑も

作って割り当てられた供出も完遂しなければと、指導員からも督促されて覚悟を新たにしていた。だが、現実の暮らしは不自由で、余分なお金もなく食べたいと思うおいしい物もなかなか買うことができなかった。戦争の様子もあまり分からずに、不安な気持ちで毎日を送るようになっていた。

ある日のこと、開拓団の牛を引き連れて満人部落に種付けに行った帰り道で、雄の牛がぞろぞろと後からついてきたので、団員の一人が銃を持ち出して撃ち、一頭を射殺してその肉を部落で分けて食べてしまった。久しぶりのごちそうで、部落一同は腹もふくれて満足していたが、翌日、満人部落の人たちが牛を探しに警察官を連れて来たので、大騒ぎとなった。牛を撃った者は山に逃れたが、警察官は団長に通告したので、事情を知らない団長は困惑し、部落の全員を集めて調べ始めたが、結局肉を食べた者は自分たちで弁償しろということになり、一同は困ってしまった。だが、日

本人の開拓団員が悪事をしてそのままにしていたら、現地人に対して悪い印象を与えることとなり、それでは日本人として恥ずかしいことなので、潔く弁償することとした。もちろん余分なお金などないので、男たちは家族に頭を下げて、日本から持参しているけなしの晴着などを売ってお金を作り弁償したが、その失敗談は今になっても忘れられない思い出話である。

そのような事件もあったので、今年こそは真剣に働いて成果を挙げようと、覚悟を新たにして農作業が始められた。

そのような開拓民の覚悟とは裏腹に戦局はいよいよ切迫していて、南方各地では玉砕、玉砕、そして転進で敵の第一線はじわじわと日本本土に迫っていた。現地人は私たちより戦争の状態を知っていて、「日本は近いうちに負けるよ!」と公言する者もいた。だが私たちはそれを聞くと、意地でも日本は勝たねばならぬと気持ちを引き締めていた。

春も過ぎるころになると、開拓団にも召集令状が届くようになり、当然私にもくるだろうと思うと、仕事をしても日夜不安が募ってきて、作業も思いどおりに進まなかった。

八月九日、突然にソ連軍は日ソ不可侵条約を一方向的に破棄して、満ソ国境の各地から戦車多数を先頭にして怒涛のごとくに侵攻を開始。それと時期を合わせたように、私たち開拓団に残っていた壮年男子がごとく召集されて、佳木斯ヂャムスの部隊に集合させられて部隊に到着したが、既にその部隊の主力は南下していて、もぬけのからとなっていた。私たちは、僅かに残っていた憲兵隊と佳木斯特務機関及び佳木斯警察署の幹部の命により、佳木斯医科大学の西村大佐の指揮下に入って、貨車に乗せられて綏化に向かった。途中で佳木斯鉄橋を爆破したが、これが唯一の戦闘場面であった。途中では、ソ連機による爆撃を受け危険な場面もあったが、無事に綏化駅に着いた。

綏化では何をすることもなく数日過ごしていた

が、そこで終戦のことを知らされた。西阿に残っているヤス子や、その他の開拓団の家族たちがこれからどうなるのかということが頭に浮かんだが、すぐに消えてしまった。やはり興奮していて頭の中が白くなっていたのだろう。

指揮官の西村大佐は私たちを集めて、「ここに到ったならば、このまま部隊編成をとっていったら、いつソ連軍が来て武装解除させられるかもしれない。そしてそのままソ連軍の捕虜となってしまう」とおりに行動せねばならないし、命の保障もない。諸君はつい数日前に召集されたばかりであり、兵隊とは言えない。そのうえにそれぞれ家族も持っているのです、このまま部隊行動をしていては、いつ家族に会えるか知れない。よってここで部隊編成を解く。今からは、各人の責任において行動せよ！」と訓示された。西村大佐の措置は大変に有り難かったが、果たしてこれから西阿にどうやって戻るかと思うと、逡巡してしまっ

開拓団から共に応召した仲間数人と相談したが、多くの意見は「西村大佐の言われるとおり、みんなと一緒にいてはいつソ連軍に捕われるか分からないし、捕らわれたらどこかに連れて行かれるかもしれない。そうなったら家族に会うことはできなくなる。これから先はどうなるか分からないが、やはりここから脱走しよう」ということで話がまとまった。

軍服のままでは逃げられないので、綏化の市街の満人の古着屋で着ていた軍服と、なげなしのお金を払って満人服を求めて、現地人になりすまして南下することにした。そのころになると鉄道も混乱していて、綏化から佳木斯に向かう列車も、いつ動くのかわからなかった。このまま佳木斯行きの列車を待っても時間の無駄と考えると、歩くしか方法がなかった。ときどき、奥地から避難民の流れに逆行して動く貨物列車があったが、現地人の服装をしているのでそれに乗ることは難しかった。

私たちと一緒に佳木斯から綏化まで来た部隊員で脱走に加わらなかった戦友は、しばらく綏化飛行場の空屋となった兵舎に収容された後に、ソ連軍の捕虜となってシベリアに送られたことを後に知って知り、私たちのとった行動は先見の明があったと思ったものだった。綏化飛行場の格納庫には、奥地からここまでたどり着いた一般邦人が千人近くも入っていて避難生活を送っていたので、私たちも一応そこにもぐり込んで、南下する準備をした。歩いて行くと決心していたが、それでも列車に乗れるようならそれにこしたことはない、交代で駅に行つて様子をうかがっていた。翌日になって駅に行つていた者から、「今晚、佳木斯に向かう避難列車が出る」という情報が入り、飛び上がる思いで綏化駅に行った。駅前は避難民でごった返していたが、荷物などのない身軽な私たちは、どうにか乗り込むことができた。客車や連結されている貨車はもちろん、機関車の屋根まで鈴なりの人であった。貨車の車軸の上に

乗って振り落とされないように体を縄で縛りつけている者、連結器の上に乗っている者もいた。私はこの有様を見ていて、つくづく戦争に負けるということの実態を知った。列車は夜明け近くになつてやっと動き出したが、途中止まつては動き、やっと動いたと思うと止まるといふことの繰り返しで返りであった。食糧は少しは携行していたので、何とか飢えることはなかったが、生理的な処理には随分と苦労した。列車は度々止まるのだが、いつ発車するかも分からないので、なるべく外に降りないで車中から処理するようにしていた。男はそれでも何とか過ごせるが、女、子供はなかなか思うようにはできずに、取り残される人もあった。

佳木斯の手前で列車は止まり、そこから先は全員歩かされた。私たちが綏化に向かうときに鉄橋を壊したことが今更ながら後悔させられた。

やっとのことで依蘭駅に着き、そこから歩いて我が家に向かったが、周囲はあまり変わってなく

以前のままであった。家に着いた日時は、はっきりとした記憶がないが八月二十二、三日ごろと思う。緩化から西阿まで四、五日もかかっていた計算になる。

開拓団は、静まり返っていて誰もいなかった。予想していたとおりであったが、荒れた様子がないのに一同ほっと安どした。この様子では全員無事に避難したことだろう。一番心配していたことが解決したので、気持ちが悪く落ち着いたのか、疲労が一度に襲ってきた。勇気をふるって我が家に入ったが、あまり乱れていなくほっとした。今となってみれば懐かしい家財道具が目に入った。そのとき家の中から一人の男が出てきて、私を見て驚きの声を上げた。私もその顔を見てびくびくした。その男は趙文遠といって、我が家で専属苦力として家族同様にして働いてくれたいた男であった。彼の話によると、当時身重だったヤス子は、部落の人たちと一緒に八月十七日の夜に、団長の引率により西阿を出発して新京（長春）に向かったと

のことだった。さらに彼は、「西阿の開拓団長から、開拓地とそれぞれの家を守ってもらいたいと頼まれた」とも言った。部落全体があまり荒らされていけない理由が分かった。開拓団で雇っていた専属苦力は、王さんというボスの指揮下に全員が入っていた。この王さんという人が非常に仁義に厚く、儒教を信奉していた人だったので、他の開拓団では想像もできないくらいに、日本人の出た後の秩序を保っていてくれたのだった。

私たちはその話を聞いて安心し、趙さんに礼を言って、「私たちが再び戻ることがなければ、家財道具一切を思うように処分してもらいたい」と頼んだ。事情が分かっていたうちは、一日も一刻も早く南下して一行に追いつくことが最も重要と考えて、家の中から必要な衣類、食糧などを持って、ここを出た。

部落を出たところに趙さんが追いかけて来て、「おれの弟が、新京で食べ物屋をやっているから、そこを頼って行け」と言って、地図や弟宛の手紙

を渡してくれた。彼の親切に礼を言って、依蘭駅に向かった。まだこの辺りにはソ連軍が進出していなかった。妨害事項は起きていなかったが、列車は時間どおりには動いていなかった。

しばらく駅前で待機していたが、時間が経つにつれて避難民が続々と集まって来て、駅前広場はたちまち埋まってしまった。このままの状態では乗車は難かしいと思つて、ホームの下に入つて休んでいた。奥地からここまでやつとのもので避難してきた日本人は乞食同然の姿をしていて、なんの希望もなく、やるせない、自暴自棄、疲労困憊、そしてだれかれかまわずに罵り合い傷つけ合い、子供も大人も泣きわめき、これがあの日本人かとはとても思えない様相だった。ヤス子もこんなになつてゐるのかと思つと、不憫になり結婚したことに後悔を覚えた。数時間も待つてやつと新京行きの列車が入つてきたが、無蓋車だった。文句は言えずに、みんなは我れ先にと乗り込み、たちまち黒山の人となつた。

列車はときどき、止まつては動かなくなり、しばらくすると再び動き出すということを繰り返していた。止まるのは駅とは関係のないところだった。人の話では、避難者団体の責任者が、みんなから集めたお金や貴金属や腕時計などを、機関士などに渡しては動かしてもらつてゐるということだった。

やつとのもので新京駅に着いた。駅前は大分荒らされていて、あの整然と整備されて美しかった昔日の面影はなかった。駅前で、日本人居留会の人々の指示で、駅から二百メートル程行ったところにある建物に向かった。そこには、「引揚者援護会敷島寮」と書かれてあつた。中に入ると階下は避難者で埋まつていて、階段に通ずるところだけが空いていたので、そこに腰をおろした。何かしらほつとした気持ちになり、うとうととしてしまった。目を覚ましたら急に空腹をおぼえたが、食べる物は何もなく、我慢するほかなかつた。

翌日、寮の人に礼を言つて趙さんからもらつた

地図を頼って、彼の弟の孟さんが働いている所を尋ね歩いた。やっと探しあてて孟さんに会った。手紙を読んで親切に迎え入れてくれた。

私は彼と相談して、これからの行動が決まるまで取りあえずここで働くこととなったが、日本人と分かるかと迷惑がかかるので言葉は一切口にせず、人に顔を見せることもしないようにすること申し渡された。私は黙々として店の隅で食器を洗ったり掃除をしたりして、店の雑用を一手に引き受けた。自分の性格をよく自覚して、努めて気持ちを押さえることに努力した。孟さんも親切に面倒をみてくれた。

新京市内は、日本人をはじめ、中国人、朝鮮人、そして白系ロシア人など、多人種の難民であふれていた。特に日本人は、進駐して来たソ連兵や他人種の人たちからことごとくに迫害を受けながら、我慢強く生きていた。暴行や、脅しなどを受けている場面にいやというほど遭ったが、私はじっと我慢をしていた。ここで正義感を発揮して

も勝つことはできず、かえって孟さんたちに迷惑がかかることを十分認識していた。

私は、孟さんやその家族の保護のもとで、日常の生活にも不自由なく、食べることに事欠かずに昭和二十年の冬を過ごしていたが、ヤス子や腹にいる子供のことを思うと、気持ちのうえからは一日として安まることがなく、日夜悩みどおしであった。店の陰から外を通る人を眺めても、郡山分郷の人を見ることはなく、焦慮感でいっぱいだった。

昭和二十一年の初夏のころになると、新京地区からの引揚げが始まった。孟さんたちからも、ここでヤス子たちと会うことを期待するより、一日も早く日本に帰って故郷で待った方が得策ではないかという助言をもらい、それもそうだと考えて手続きをした。孟さんからも、今までの賃金だと言った過分の金を渡された。この金で日本に着くまでの間、随分と助かった。孟さんとその家族には感謝の言葉がなかった。

昭和二十一年の初秋に、葫蘆島コロボックから引揚船に乗船して博多に着き、やっとの思いで福島の山の中に幽霊のような姿で戻った。引き揚げる間、心の支えとしていたヤス子の姿はなく、生死不明という言葉だけが耳に入ってきた。私の気持ちとしては既に一足先に引き揚げていて、赤ん坊を抱いて笑顔で私を迎えてくれることを念じていて、引揚船の中でもそのことばかりが夢に浮かんでいたのだが、身も心も落ち込んでしまった。

ヤス子の実家にも一応、帰って来た挨拶に行っていたが、実家では悲しみにくれていて、「お前になんぞ、嫁にくれてやらねばよかった！」という言葉まで出たが、後悔の涙を止まることなく流している老父母の姿を見て、私もどうしようもなく、ただ頭を下げるのみだった。私だって好き好んでこんなことになったのではなく、すべてはお国のためにと行って行動した結果なのだからと腹の中では考えていたが、それを言葉に出して言うことはできなかった。

帰ってきてても相変わらずの小作貧乏農家。長男だからと家の中に居座ることもできず、何とかしなければと毎日悩んで過ごしていた。そんな気持ちになつているときには、必ずまだ帰って来ないヤス子たちのことが思い出されて、一人で泣いていたこともあった。

開拓団仲間もぼちぼち帰って来て、いろいろな情報が伝わってきた。それによると、政府では、引揚者に開拓地を世話する計画ができて、逐次その募集を始めたということだった。私もそこに行くしか他に生きる道はないと決心した。福島県に予定された開拓地は、家から遠い安達太良山の麓で、戦時中に大陸の花嫁を養成して各地の開拓団に送り出していたキリスト教団の井関牧師が、その責任を感じて引揚者の救済事業として県に陳情して、開拓地として指定を受けた所で、既に男女四十人ぐらゐの入植者が入っていた。その中には、かつての郡山分郷の仲間、斎藤や立花など十人もいて、生きて再会したことを喜び合い、これ

で今までの気鬱が一度に晴れ上がり元気が出て、再び共に頑張ろうという約束になった。気持ちの上では一生懸命にやろうということで一致したが、肝心の資金も資材も、何もない。まず手始めに、岳温泉下の農家の小屋を借りて分宿した。

しかし、村では山林原野をとられては大変とばかりに、旧地主が団結して反対運動を起こし始めた。それに対して、「おれが解決する」と公約を掲げて当選する村長も現われて、村を挙げての大騒動となった。解決するのを待っていたのでは、時間ばかりかかってどうしようもないと、国有林の中に笹小屋を建ててみんなで潜り込み、周囲の開墾を始めた。昭和二十一年も暮れようとするころであった。

西阿の開拓団に入植したときのように、先遣隊が一応の受け入れ態勢を整えたのとは異なり、まったく前人未到の地に入ったのだから、食糧は配給米に依存するしかなく、とてもではなく開墾の重労働には耐えることができなかつた。しか

し、そのなかにあつて一番早く入植した渡辺美寛の畑の大根が意外によく育っていたので、みんなでその大根を分けてもらい夢中で食べたこともあつた。井関先生が、衣類や食料品を集めてきて援助してくれたので、それが心の支えになつていた。

入植最初の事件は、満州時代の第六次開拓団だった福島村の帰国者が集団をつくつて、安達太良山開放地区を独占しようとして入つて、それに全国からの入植希望者が加わり押し掛けて来たことである。形勢緊迫したが、井関先生が先頭に立ち、満州帰りの花嫁部隊を擁して県庁に陳情し、私たちの開拓グループを交通至便な地域に指定して、私たちの権利を守ってくれたので、そこを平和村と命名した。

山の冬はひと足早く、笹小屋は陽も射し込み風情深いものがあつたが、粉雪が舞い込むと寝床が真っ白くなり、寒気に震えあがる日もしばしばだった。あの寒気厳しい満州で真冬を過ごしてき

た引揚者である私たちでも、体力が弱っていてこの冬をどうして越すかが一番の不安であった。最初四十人以上もいた仲間も次第に離れて、三分の一程度になっていった。それに病人が頻発し始めて、寂しい限りだった。クリスマスには井関先生に招かれて、教会で激励と慰問を受けたりしたことは大変に有り難く力強く思った。

井関先生は心配のあまり新聞社に申し出て、「追い立てられる平和村」と題してのキャンペーンを始めて、私たちに勇氣と希望を与えてくれた。私たちにも、満州奥地で心身を鍛えてきた意地と根性があり、苦難と不安の冬によく堪えて春を迎えることができた。

国有林野局でも、予想に反して入植希望者の多いことを持て余して困惑を示すようになってきたが、私たちはそんなことにはかまわずに、遠慮なく掘り起こして、馬鈴薯^{パレイシヨ}、粟、大豆、その他を植え付けたが、火山灰地のうえに岩石の多い瘦せた開拓地では、十分な肥料の配給もなく、そのうえ

農業経験も浅い者では努力に報いる収穫がなく、そのうえに鳥や野獣の被害も多く、泣き面に蜂と云うのが実情であった。次第に挫折感に怯む者が増えてきた。

だが、残った者はやるよりほかに生きる道はないと考え、命を賭けてもやらなければという悲壮な気持ちを持つようになっていた。

そのような努力に対して県庁でも前向きに援助を考え、二本松市に開拓課の県事務所が設けられた。入植者代表は、日参して指導事項や融資、補助金などについての細かいことを打ち合わせては、その実行に努力していた。

そのころになると、終戦後の満州各地の開拓団の様子がだんだんと伝わってくるようになった。郡山分郷集団の様子も断片的ながら分かり、我が最愛の妻、ヤス子の行動もおおむね想像できた。集団と共に避難している途中で双子の女の子を出産したが、すぐに死亡したらしかった。その後のヤス子の行動は誰も知らず、生死不明であること

も分かった。かわいそうなことをしたと、涙を流すほかなかった。こうなれば、ヤス子の供養のためにも開墾に勢力をつぎ込むことだと誓った。

だが、作業は困難を極め、成果は遅々として進まなかった。春になると山奥に入って、木の芽、山菜などを摘んで来ては主食代わりに食べていた。

二、三年このような経過をたどって過ぎていたが、この山冷地での農作業は無理だということになり、酪農に切り換えるようにと県、郡の指導もあったが、それがどの程度信用できるのかが分からず、北海道での成功例を話されても実感がなく、さらに北海道から模範農家を誘致するという話もあったが、四囲の環境など事情の異なることでもあり、あまり乗り気にならなかった。

その一方で、井関先生は常に平和村の先行きを心配されていて、仙台にあったGHQの東北司令部に陳情に行き民有地の解放を請願し、認可された。国有の林野も含めて見渡す限り広大な安達太

良山麓は、無条件で開拓農地に解放され、それに伴って、国有林より標高の低い旧玉井、大山の両村にまたがる民有林約百ヘクタールの払下げが平和村に決定した。東北興業社が測量し製図して平和村に引き渡されて、名実共に私たちの土地となった。

開拓の前途にもようやく目鼻がつき始めたころ、世話をしてくれる人がいて私は再婚したが、この平和村での結婚第一号であった。だが、この笹小屋に迎えた花嫁は、この生活があまりにも原始的で世間離れをしていたので耐えきれずに、数カ月のうちに自らの意志で私から去って行った。私はそのことを忘れようとして、開墾だけに没頭した。

私の自慢は早寝早起だが、それは並外れていて、夕方に眠気がくるとすぐに寝付き、夜明け前には目覚めて働き始めていた。土地が解放されることになった途端に、元の地主は急いで自分たちの土地の立木から笹に至るまで伐採して売ってし

まった。残った山肌には何もなく岩石が露出したままで、風が吹けば土砂が飛び散り、雨が降れば畑土が流される有様で、せっかく植え付けた馬鈴薯も土が飛び散って種芋が転げ出る有様では、とてもではなく農耕は不可能で、日が経つにつれてせっかく希望を持ってここまで頑張ってきた人たちも辛抱できず、借金を背負ったまま夜逃げする人も出てきた。

開拓者に課せられた義務に精耕検査があり、所有地五町三反のうち最低限三町六反（約三百六十アール）を開墾し、なお残りについても除草のうえ畑の形にしなければ取り上げるといふ厳格なもので、完全に合格する者は少なかった。

私は、一人ではとてもこの開拓を続けることは難かしいと考え、遠藤要巳氏の仲人で、青田村から嫁を迎えて三度目の結婚をした。妻となった菊江は、前妻とは違って一応の家と土地もあるもので、安心して共に精を出して働いてくれた。次々と子供も生まれたが、四人すべてが男であったの

で、育てるまでは大変な苦労があったが、大きくなるとみんな家の手伝いをしてくれて助かった。

昭和二十七年の冷害大凶作では、開拓地の収穫は皆無となる大惨状で、その救済のために県開拓課も平和村役場も重い腰を上げて、開拓者救済に全力を傾注してくれた。その結果、大山、玉井両村は合併し大玉村となり平和村も吸収されたが、道路改善工事、郵便の戸別配達、電灯電話の開設、開拓者子弟の通学改善など開拓地の生活環境整備が始まり、ようやく安心して開拓事業に専念できる環境となった。さらに、問題だった精耕検査の延期願いを二度出した結果、大半の家が合格できるようになり、開拓農家の生活は安定し、将来に対する希望が持てることとなった。

高度成長の波に乗ってこの地方も、農耕不能の地にはゴルフ場ができ、また温泉掘削で一大保養地と化し、開拓地の周辺には別荘が急増し、開拓農家もそれぞれ立派な住宅を新築し、自家用車やトラック、それに農耕用トラクターなども保有

し、落ち着いた生活をするようになった。我が家でも四人の子供はそれぞれに成長し、自分で選んだ道を進んでいる。

今は、頼まれれば満州開拓、終戦前後の苦労話などを話し、避難中無念な思いをしながら死んでいたであろうヤス子や二人の子供のこと、そして共に苦労した友達を追悼しているが、私たちはお国のためということで働き、そしてその犠牲となって現在の平和をもたらしたことを特に力説している。

満州十年の生活から引揚げて

栃木県 太田 サヨ

一 生い立ちと渡満の動機

私は、栃木県の北部那須連山の麓、那須温泉の南に位置する那須郡西那須野の養蚕農家の、九人兄弟の八番目の子供として大正四（一九一五）年

五月に生まれました。

物心のついた幼年のころから、家の躰として自分でできることは自分でやるということを強く言われて育ってきました。小学校四、五年のころになると、台所に立って夕食の仕度をしたり、養蚕の最盛期には桑掛けといって蚕に桑の葉を与える仕事などを、猫の手も借りたいくらい忙しい両親たちと一緒に養蚕場で働いたものでした。

当時の日本全体は不況のどん底にあって、「働けど、働けど我が暮らし楽にならず！」の時代でしたので、養蚕業もその例に洩れず大変な不況でした。繭が不況なのでそれに関連して、その繭糸を原材料とする織物工場も不況で、小説や映画などにもなって大正・昭和の大恐慌の代表のような、「女工哀史」で国民の涙を誘うような話は事実のことであった時代でした。

繭一貫目（約四キログラム）が五十銭から上物で六、七十銭ぐらいで、それはそれは目も当てられない状況でした。